

大野城市の文化財 第51集

大野城市の 戦争とくらし



2021

大野城市教育委員会

序

大野城市には、国指定特別史跡大野城跡、水城跡などたくさんの遺跡や地域の暮らしが育んできた民俗文化財が残されています。本市では毎年、文化財調査を実施しており、これら文化財調査の内容を広く市民の皆様にご覧いただくために、年に1冊ずつ『大野城市の文化財』を刊行してまいりました。

令和2（2020）年は終戦75年の節目の年にあたることから、10～11月に大野城心のふるさと館で企画展「大野城市の戦争と暮らし」を開催いたしました。企画展では、大野城市が終戦50周年に収集・刊行した戦争体験記やこれまで市民の皆様から寄贈いただいた戦争関連資料、発掘された洞窟壕跡、そして戦後アメリカ軍が駐留した板付基地について紹介しました。本書はその企画展の内容を冊子にまとめたものです。

太平洋戦争終結から75年、そして板付基地が返還されてから48年が経過した今、戦争や板付基地があった頃の記憶を伝えていくことが年々、難しくなっています。

本書を平和学習に広くご活用いただき、戦争の記憶を後世に引き継ぐことで、戦争のない平和でよりよい大野城市の暮らしのために、少しでも役立てていただければ幸いです。

令和3年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

目次

1. 大野城市の戦争遺産	1
2. 大野村の戦争とくらし	5
2.1 地下に疎開した軍需工場	7
2.2 本土決戦準備	9
3. 後世に引き継がれる戦争の記憶	11
4. 戦後のくらしと板付基地	14
4.1 板付基地の生き証人「米軍ハウス」	16
4.2 板付基地と白木原ベース通りの思い出	17
5. おわりに	23

凡例

1. 本書は、令和2（2020）年10月6日～11月29日に大野城心のふるさと館で実施した企画展「大野城市の戦争とくらし」の成果をまとめたものです。
2. 本書において、「聯隊」を「連隊」としたように用語の旧字体を新字体に改め、師団や連隊等の号数は漢数字表記が正式であるが、本文中や表ではアラビア数字に改めたものがあります。
3. 図1で使用した地図は、国土地理院の1/25,000の地形図『福岡南部』・『太宰府』・『二日市』・『不入道』を使用し、編集・加工して掲載しています。
4. 本書に掲載したイラストや写真、また聞き取り調査の内容につきましては、下記の方々ならびに機関からご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）赤司清子、麻生政昭、井手勲、井上善久、春日市教育委員会、春日ベース・ハウスの会、粕屋町立歴史資料館、九州産業大学 建築都市工学部 住居・インテリア学科 松野尾研究室、航空自衛隊春日基地 渉外室長3等空佐 佐藤慎一、（有）太平閣 呉世宏、太宰府市文化ふれあい館、ちいさこべ幼稚園、筑紫野市歴史資料館、筑前町立大刀洗平和記念館、堤慎一郎、東司ミドリ、万世特攻平和祈念館、八尋千世、渡辺鉄工株式会社 岡田正弘・林真吾・吉田英俊
5. 本書に掲載の写真について出典の記載のないものは、大野城市教育委員会所蔵です。
6. 本書の作成は、資料調査や証言書き起こし作業等、ふるさと文化財課啓発・整備担当職員の山村智子、鮫島由佳、深町美佳が担当し、執筆・編集は山村が行いました。

1. 大野城市の戦争遺産

大野城市 瓦田に、明治 10 (1877) 年～昭和 20 (1945) 年までの間で大野村 (現在の大野城市) から戦地に赴き、亡くなられた戦没者 241 名の名前が刻まれた戦没者哀頌碑が建立されています。戦没者の内、昭和 12 (1937) 年の日中戦争から昭和 20 年の太平洋戦争 終結までのわずか 8 年間に亡くなられた方は 220 名におよびます。この石碑は、近代兵器を使用した戦争がいかに残酷で悲惨な状況をもたらすのか、今を生きるわたしたちに伝えてくれています。

大野城市にはこのような石碑の他に、太平洋戦争時の軍需工場や、戦後にアメリカ軍が駐留した板付基地 (春日原住宅地区) など、多くの戦争遺産が残されています。これらの戦争遺産のほとんどは、急速に都市化が進む大野城市の中で住宅地や商業地、公園などに変わっています。

しかし、私たちが暮らす大野城市の街並みの中に、軍需工場や板付基地の土地区割り、電柱、鉄条網や米軍ハウスなど、いまだにその名残を残す遺産も少なくありません。

また、近年の発掘調査で地下に疎開した軍需工場や陣地構築による巨大な壕が発見され、戦争を伝える大切な文化財として認識されるようになってきました。



写真1 現在の白木原ベース通り (通称)



写真2 忠魂碑 (中央)・戦没者哀頌碑 (右側)



写真3 板付基地 (春日原住宅地区) で使用されていた電柱 (JR大野城駅前)

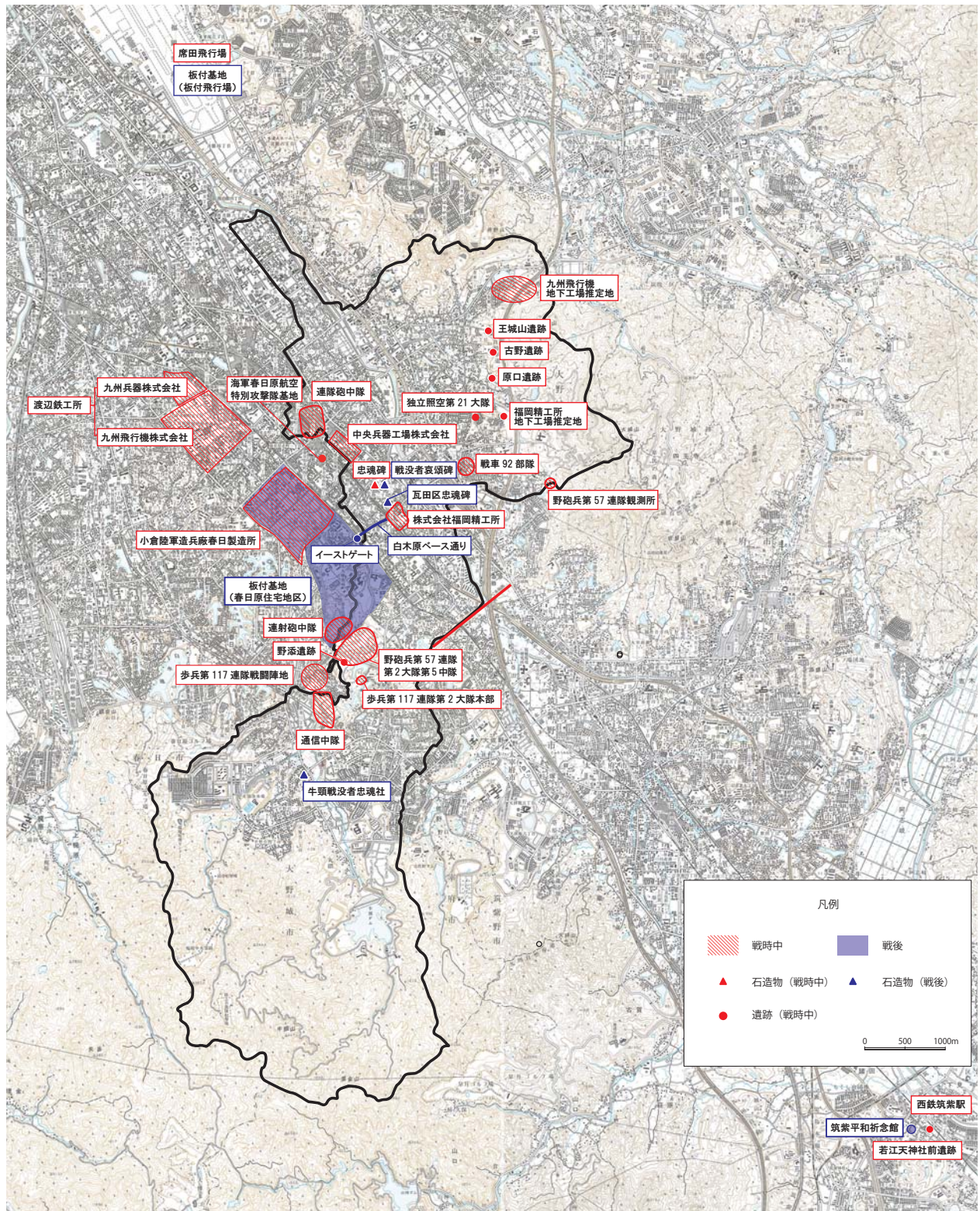


図1 大野城市の戦争遺産配置図 (1/75,000)

名称	歩兵第117連隊	所在	大字上大利字梅頭・野添、大字牛頭字花無尾ほか	所有		現状	消滅か？
内容	歩兵第117連隊は昭和15(1940)年8月に秋田市で編成されて第57師団に編入。同16(1941)年満州に渡ってのち同20(1945)年3月31日の本土防衛のため移動を命じられ、博多湾に上陸後第2大隊本部を大野村上大利字野添に置いた。						
名称	野砲兵第57連隊	所在	大字上大利字梅頭ほか	所有		現状	消滅か？
内容	大野村上大利字梅頭の三兼池周辺に第2大隊第5中隊が布陣した。						
名称	独立照空第21大隊	所在	大字釜蓋字雉子ヶ尾	所有		現状	消滅か？
内容	昭和16(1941)年に広島で編成された部隊(通称「慧」8079部隊)は同20(1945)年5月11日に遠賀から移動し、村民50人とともに陣地構築を行った。陣地は沖坂池東南側の松山と北側の桃畑を拓いて照空灯、聴音機、対空双眼鏡、発電搭載車などを配置し、周囲に兵舎を配置した。戦後の検分によれば、沖坂池の周りに衛兵所、炊事場、事務室、将校宿舎、兵舎などが残っていた。						
名称	戦車92部隊	所在	大字釜蓋	所有		現状	消滅か？
内容	水城村境に戦車壕が造られていた。また、大字上大利船頭ヶ池東側や大字上大利字梅頭、谷蟹の丘陵地帯に道路を造るときに戦車を往復させていた。『山上高太郎日記』には、昭和20(1945)年7月に92部隊副官他1名が上大利・平田に来るらしいこと、また同年8月には釜蓋県道に戦車壕を造るから関連工作物や用材、人夫協力を依頼されたことが書かれている。						
名称	野添遺跡第6次調査洞窟壕	所在	大字上大利字梅頭	所有		現状	消滅
内容	野添遺跡第6次調査地において確認した。幅1.5～1.7mの横穴を丘陵中腹に水平に掘り込んでいた。約16.5mまで奥に掘り進んだが、完掘できなかった。高さは約3mほどであった。『大野城市史』の記載より、野砲第57連隊による洞窟壕と考えた。なお、上大利在住の古老から、秋田から来た兵隊が現在の南ヶ丘周辺の松を切り出して坑木に使い、戦後坑材を洞窟壕から引き出して博多に売りに行ってかなりの現金収入を得たとの聞き取りがあった。						
名称	本堂遺跡第7次調査洞窟壕	所在	大字上大利字本堂	所有		現状	消滅
内容	本堂遺跡第7次調査において確認したが、調査地に面した北側丘陵斜面に位置し、未調査のまま調査を終了した。なお、上大利北土地区画整理地内では、この他に梅頭遺跡第4次調査地東側丘陵上に兵舎の跡と思しき土坑を確認したが、正確な情報が得られず、調査を断念した。						
名称	株式会社福岡精工所	所在	大字白木原	所有		現状	消滅
内容	昭和16(1941)年に海軍管理工場の指定を受け、水上飛行機のフロートを中心とした飛行機部品や魚雷の製造に着手した。現在の野野中学校や福岡県筑紫総合庁舎、西鉄天神大牟田線までの一帯が工場用地になった。						
名称	福岡精工所洞窟工場	所在	大字乙金字沖坂	所有		現状	消滅か？
内容	大野村白木原にあった福岡精工所は、昭和19(1944)年初めごろから疎開を開始、第一次疎開工場として大字乙金字沖坂の北方丘陵地帯に洞窟工場を作り、同20年8月中旬ごろには一部作業を開始していた。第二次疎開工場は、終戦後整地が終わった程度であった。						
名称	王城山遺跡第2次調査洞窟壕	所在	大字乙金字王城山	所有		現状	発掘調査後消滅
内容	大野城市教育委員会による平成24～26(2014～2016)年の王城山遺跡第2次調査地において確認した。東西50m、南北35mほどの平面コの字形を呈する。壁面には板材が見られ、コンクリート土台もある。磁器・ガラス瓶や合板なども出土した。出土遺物等の状況から、九州飛行機株式会社の洞窟工場と考えられる。						
名称	九州飛行機雑餉工場唐山疎開工場	所在	大字乙金字唐山	所有		現状	消滅か？
内容	九州飛行機は、昭和19(1944)年初めごろから疎開を始めた。同20(1945)年1月に九州飛行機より工場疎開の申し入れがあり、2月に建設を始めた。現在の唐山池周辺に洞窟工場があり、古老の記憶をもとに書き起こした地図が大野城市史下巻近代・現代編に掲載されている。						
名称	中央兵器株式会社	所在	錦町1・2丁目	所有		現状	消滅か？
内容	昭和18(1943)年に、現在の野野イオンの所に整備され、魚雷関係の部品製造などを行った。						
名称	古野遺跡第4次調査洞窟壕	所在	大字乙金字古野	所有		現状	発掘調査後消滅
内容	太平洋戦争末期の洞窟壕跡を確認。大野城市教育委員会による平成23～25(2011～2013)年の調査で土師器小皿(燈明皿として使用。「敵国降伏」の型押し)・陶磁器・ガラス製品・鉄製品が出土した。						

表1 大野城市の戦争遺産一覧表

名称	古野遺跡第3次調査洞窟壕	所在	大字乙金字古野	所有		現状	発掘調査後消滅
内容	大野城市教育委員会が平成22(2010)年に調査。平面口の字形に巡る。幅1.9~2.6mで鉄器・木材・陶磁器・瓦が出土。疎開工場と考えられる。						
名称	原口遺跡第4次調査A区洞窟壕	所在	大字乙金字原口	所有		現状	発掘調査後消滅
内容	大野城市教育委員会が平成22~23(2010~2011)年に調査。幅3.5~3.6mで、長さは35m以上延びる。板材と横木の痕跡が確認された。						
名称	原口遺跡第4次調査C区洞窟壕	所在	大字乙金字原口	所有		現状	発掘調査後消滅
内容	大野城市教育委員会が平成22~23(2010~2011)年に調査。幅最大3.4m、残存長22m。柱穴列を側壁沿いに確認した。板材・柱材・針金などが出土した。						
名称	牛頭戦没者忠魂社	所在	牛頭3丁目	所有	私有地	現状	現存
内容	平野神社本殿左側の楠板に日清・日露戦争から太平洋戦争にいたる牛頭出身戦没者の氏名が刻まれて安置されている。大正15(1926)年銘の石造り社殿は、旧牛頭小学校校庭に建てられていた御真影奉安殿であり、空殿になっていたものを昭和24(1949)年に移設して忠魂社とした。						
名称	瓦田区忠魂碑	所在	白木原3丁目	所有	私有地	現状	現存
内容	瓦田区納骨堂前に昭和33(1958)年に建てられた。日露戦争・大東亜戦争の戦没者31人の名前が刻まれている。						
名称	忠魂碑	所在	瓦田3丁目	所有	私有地	現状	現存
内容	昭和15(1940)年2月11日建立。林仙之陸軍大将の揮毫による。明治以降の戦役における戦没者の冥福を祈って建立された。建設資金はすべて地域住民や戦没者家族の奉賛金、戦場にある出征兵士からの送金、地元企業からの援助金により賅われた。						
名称	忠魂奉賛碑	所在	瓦田3丁目	所有	私有地	現状	現存
内容	忠魂碑前の左側にある。題字は大野村村長・山上高太郎の筆による。						
名称	戦没者哀頌碑	所在	瓦田3丁目	所有	私有地	現状	現存
内容	忠魂碑の前面右側に建てており、明治以降すべての戦役・事変に大野村から出征して戦死、あるいは現役兵として服務中に病死された241柱の芳名が刻まれている。昭和27(1952)年5月20日に大野小学校講堂において、白壁大野町長が祭主となって戦没者慰霊祭を行い、引き続き講話発効記念式典を挙行し、式後この戦没者哀頌碑の除幕式が行われた。						
名称	戦没者墓碑銘	所在	瓦田3丁目	所有	私有地	現状	現存
内容	忠魂碑の左側にある。西南戦争以来大東亜戦争までの墓碑銘。忠魂碑の階段を上がった左右に戦没者哀頌碑と対となって建つ。						
名称	鉄条網	所在	白木原、上大利	所有	私有地	現状	現存
内容	板付基地を取り囲んでいた鉄条網がJR大野城駅西口線路周辺、大利中学校前に残存している。						
名称	電柱	所在	白木原	所有	私有地	現状	現存
内容	JR大野城駅前に木製の電柱が2本残存。板付基地のカミサリーの敷地に建っていた電柱という証言がある。						
名称	米軍ハウス	所在	雑餉隈町、栄町、錦町、山田、筒井、白木原、乙金ほか	所有	私有地	現状	現存
内容	戦後、アメリカ軍が昭和20(1945)年に板付基地(春日原住宅地区)を大野村と春日村に設置。昭和25~28(1950~53)年の朝鮮戦争時には駐留するアメリカ軍とその家族用の住宅として、基地から5マイル(8キロ)圏内に米兵向け住宅、いわゆる米軍ハウスが作られた。						

表2 大野城市の戦争遺産一覧表

2. 大野村の戦争とくらし

昭和12(1937)年に日中戦争が始まり、昭和13(1938)年には戦時体制強化を目的として「国家総動員法」が公布され、大野村でも「国民生活は総力戦」のもと、消費節約、貯蓄奨励、勤労奉仕、生活改善が進められました。大野村では戸主を集めて、軍幹部から戦況や世界列強の動きなどを聞く時局講演会が開催され、『時局と貯蓄』など関連の書籍も出版されました。

昭和16(1941)年12月8日、アメリカ・イギリスへの宣戦布告、真珠湾攻撃で太平洋戦争に突入すると、衣食住から娯楽・貯蓄に至るまで更にくらしへの統制が行われるようになりました。日本は「貯蓄はお国へのご奉仕」として戦時貯蓄債券などを次々と発行し、国民がそれらを購入することで戦線の拡大とともに膨らむ軍事費を賄いました。

昭和17(1942)年になると、武器を製造する金属を集めるため、人々のくらしの中にある金属製品(井戸ポンプや筆筒の把手、鐘など)の供出が行われました。金属の代用品として陶器や木などが使われるようになりました。

同年11月頃から米の配給制が始まり、純農村地帯であった大野村は、耕作面積に



『時局と貯蓄』昭和16年 大政翼賛会発行



写真4 時局説明会

赤司岩雄氏所蔵



戦時貯蓄債券 昭和17年10月 日本勸業銀行発行



徴兵保険案内

じて決められた米を供出することになりました。戦時中、働き手の若者たちが出征し、村では米作りに苦勞する中、大野村の農家たちは集落ごとに協力して、田植えや草取り、稲刈りに精を出し、国への供出を毎年完遂していました。

また、村の農家では、日頃から自分たちの食事は米に麦を混ぜたり、根菜類を混ぜたりして食べる米の量を節約し、その分の米を販売することで生計を立てていました。しかし、米の供出制では農家ごとの世帯数に応じた保有米が決められており、農家に割り当てられた米の量を供出後、余った米を農家が自由に販売することができませんでした。そこで、「米が余っても販売できないなら、自分たちで食べてしまおう」ということで、戦時中に大野村の農家は白米を食べる習慣ができました。

一方、戦時中の大野村のくらしで不足したのは、農作業などで消耗する衣料でした。国は衣料食品と同じように、昭和17年2月から配給制を行っていました。世帯ごとに衣料切符が配布され、点数に応じた衣料を手に入れることになっていました。昭和19(1944)年になると繊維製品が枯渇し、靴下やタオルなども手に入らなくなってきました。

この頃、食糧難で困っていた都市部の人々は、大野村へ衣料を抱えてやって来るようになりました。大野村の人々は米や野菜の農産物と衣料を交換して、深刻な衣料不足を乗り切っていました。



はなおかしきとうせい
花岡式陶製井戸ポンプ胴体



ちゆうごくかんとん ぶしんたいん
写真5 中国広東婦人団に田植を披露する大野村の女性たち 昭和14年



衣料切符 昭和23～24年

2.1 地下に疎開した軍需工場

昭和 16 (1941) 年以降、太平洋戦争の拡大とともに民間工場では軍需品への生産転換が行われました。大野村では昭和 16 年に「宮田自転車製作所福岡工場」が、飛行機部品や魚雷の製造を行う「株式会社福岡精工所」になり、昭和 18 (1943) 年に「日本自動車株式会社」が航空機用の魚雷を製造する「中央兵器株式会社」になりました。同年、大野村に隣接する春日村では「渡辺鉄工所」から分かれた「九州兵器株式会社」が魚雷の製造や実験を行い、「九州飛行機株式会社雑餉隈工場」では、機上作業練習機「白菊」、零式水上偵察機や局地戦闘機「震電」(J7) など 16 種類 2,620 機の軍用機を製造しました。

太平洋戦争末期の昭和 19 (1944) 年になると、都市部や軍需工場などを狙った B-29 による大規模な空襲が多発するようになり、九州飛行機株式会社雑餉隈工場は昭和 20 (1945) 年 4 月から春日村小倉・大土居、筑紫村原田、大野村乙金の丘陵地などに洞窟壕を掘り、工場の一部を地下に疎開させました。戦後、大野村乙金の疎開工場は製造していた軍用機などの記憶とともに地下に埋没してしまい、大まかな場所しか分からなくなっていました。ところが、平成 19 (2007) 年度から乙金地区で区画整理事業に伴う発掘調査が開始され、平成 25 (2013) 年度に行った王城山遺跡第 2 次調査で大規模な洞窟壕跡が発見されました。丘陵に掘られた洞窟壕は内部の高さ 3 m、幅 3 m の広さがありました。天井と壁面を板と丸太で補強し、出入り口が 2 ヶ所設けられたコの字形をしていました。洞窟壕の内部からは大量の磚子（磁器製の絶縁体）やコンセントが出土し、工場内に電気を引いていたことが分かりました。洞窟壕からは磚子の他に、機械治具や金属板、木質遺物などが出土し、この巨大洞窟壕の性格や用途を知る上で重要な手がかりとなりました。

九州飛行機株式会社が昭和 20 年に製造していた軍用機のひとつに零式水上偵察機があります。九州飛行機株式会社で製造された零式水上偵察機は、鹿児島県南さつま市の吹上浜沖の海底から引き揚げられ、万世特攻平和祈念館に展示されている一機だけが現存しています。この機体の電信員席後方に取り付けられた木質部材と、洞窟壕で出土した木質遺物は同様の加工痕が認められ、この洞窟壕内で零式水上偵察機の部材加工を行っていたことが分かりました。



写真 6 洞窟壕の壁に使われた杭と板材



写真 7 巨大な洞窟壕（上空から）



機械治具（円筒内径研磨盤）



木質遺物



写真8 九州飛行機株式会社製作の機体番号「九飛 41116号」の零式水上偵察機全景 万世特攻平和祈念館提供



写真9 電信員席後方の木質部材 万世特攻平和祈念館提供

生きてきた 今日まで 自分なりに懸命に生きてきた 宮原弘子さん

昭和十八年四月、私達はやっと農家の手伝いを解放された。喜びも束の間、今度は、家族と離れ九州飛行機株式会社に学徒動員としてかり出された。…（中略）…翌日、私達が行ったところは、第二十四工場で、飛行機の翼を作る部品をミールリングや旋盤せんぱんを使って仕上げの仕事、大きな機械の立ち並ぶ工場内、今日からここが私達の職場である。…（中略）…

寮の集団生活にも少しずつなれてきた頃、日に日に空襲が激しくなっていく。私達は、近くの工場から遠くの乙金の壕の中に移った。真っ暗な穴の中に大きな機械が並んでいる光景は不気味そのもの。天井から水がポトポト落ちてくる。足元は水浸し、僅かな光の中での作業、仕事はなかなかかはかどらない。終了して外に出ると、急に光を受けて目がチカチカ頭はグラグラ。苦しい前の春日村より乙金までの道のりは遠い。…（中略）…

一年過ぎた頃、私達の汗と油と涙とひもじさの結晶として海軍機「J7」が生まれた。「J7」は、一度の試験飛行することもなく工場の広場に姿を見せただけで、いつの間にか消えてしまった。「J7」あなたとそして私達の青春時代、それは一体何だったのだろう。乗ることも許されない「J7」の胴体にそっと釘で自分の名前を小さく刻み込んだ。誰に見咎みとがめられることもなく五十年過ぎた今、あの時のあなたはどこにどうしているだろうか。

『平成9年募集 ―戦争体験記―』粕屋町教育委員会より一部抜粋

2.2 本土決戦準備

昭和20(1945)年1月20日、太平洋戦争開戦から初めてとなる陸海軍共通の作戦計画「帝国陸海軍作戦計画大綱」が策定され、本土決戦準備が進められることになりました。西日本を総括する第2総軍は司令部を広島に置き、九州を統率する第16方面軍は戦闘要員の配備と防衛陣地構築を急ぐことになりました。

第16方面軍では連合軍が博多湾や福岡海岸から上陸・南進した場合を想定し、福岡平野の最狭部に構築された日本最古の防衛施設「水城」大堤の前面で連合軍を迎え撃つという戦略を立て、水城後方の筑紫野山家に司令部を置きました。司令部は進軍してくる連合軍に対する攻撃目標地点を山田四ツ角(現在の大野城市山田4丁目交差点)とし、水城前面に位置する大野村には水城東側の四王寺山麓の釜蓋地区と、水城西側の牛頸山麓の上大利、下大利、牛頸に壕を掘り、山砲、歩兵砲、速射砲などの重火器と戦車を配備することにしました。戦闘要員として、大野村には第57師団(歩兵第117連隊や野砲兵第57連隊)、独立照空第21連隊、戦車92連隊が配備されました。そのうち、満州でソビエトと満州との国境警備につき、秋田県出身者を中心に編成されていた第57師団は、博多湾から上陸し、同年4月23日から大野村と協議を行い、牛頸山、四王寺山から数万の木材を伐り出して陣地構築を行いました。陣地構築に必要な木材の伐採に村民も協力し、兵舎用建築部材も提供しました。この頃、軍隊でも食料に不

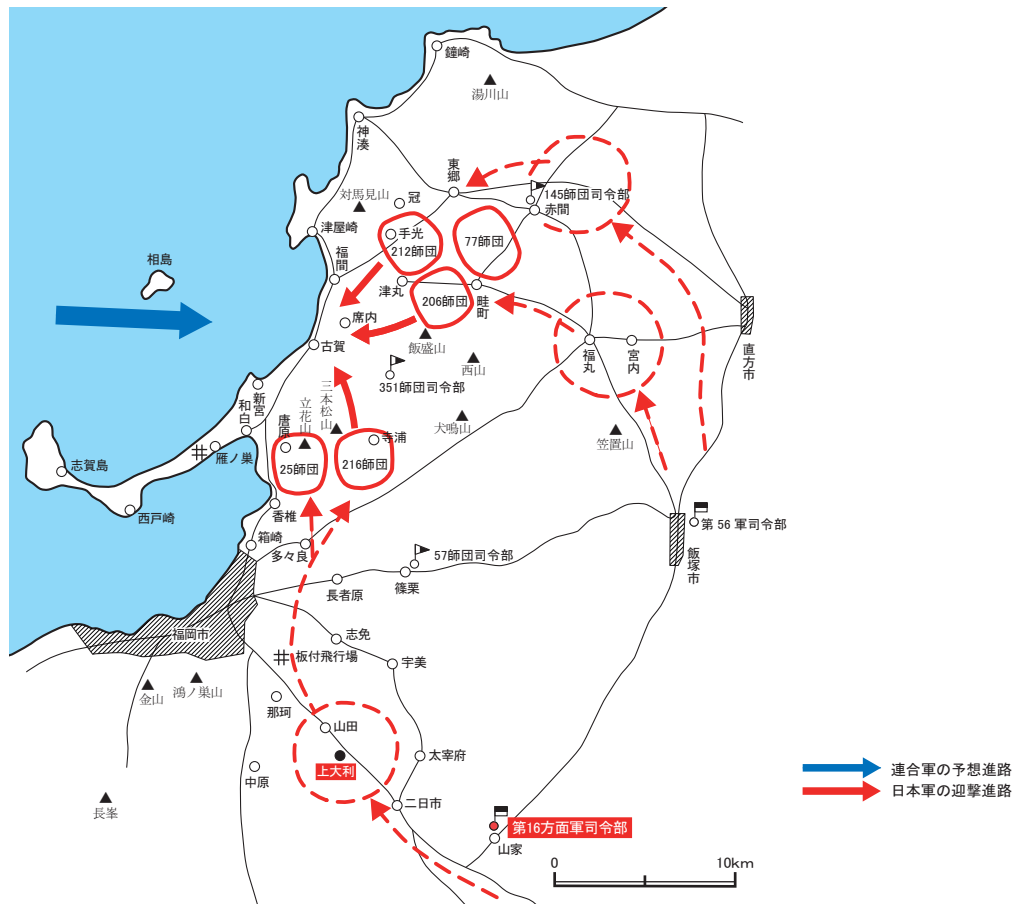


図2 福岡会戦構想概見図

自由じゆうしており、現地調達が求められ、大野村では軍隊に耕作地こうさくと種しゅ苗びょうの提供を行いました。牛頸、上大利、下大利の婦人会ふじんかいや処しよ女じよ会かいは、それぞれの陣地構築隊に握り飯にぎめしや草餅くさもち、野菜やさいや薪まきなどを提供し、輪番りんぱんで炊事すいじの手伝いてつだを行ったり、兵舎へいしや近くの民家まいるでは毎日まいにち1軒けんずつ数人すうにんに分けて、兵士たちの風呂ふろの世話せわを行いました。野戦病院やせんびやういんは牛頸平野神社ひらのじんじやが貸し与えられ、2人の軍医ぐんいが神社近くの民家で寝泊まりしていましたが、近所きんじよの急病人きゆうびやうにんの診察しんさつも気軽に引き受け、地元民かんとんに感謝かんしゃされていました。

こうした中、6月19日、B-29爆撃機60数機による福岡大空襲では、大野村釜蓋付近に展開していた独立照空第21大隊は、大野村のはるか上空を通過していくB-29爆撃機の腹を照らし、高射砲こうしやほうを打ちつづけましたが届かず、何一つ抵抗できない口惜しさと情けなさを噛みしめることになりました。7月下旬に軍と民の相互協力により陣地構築がおおよそ完成し、各地区の神社境内などで兵隊と婦人会ごうどうえんげいかい、処女会合同演芸会せんじんが開催され、戦陣せんじんの中なかにありながら、芸能達人げいのうたつしやな秋田県出身兵士たちの歌うたや踊りおどでしばし和やかな時を過ごしました。8月6日の広島なかさきに続いて、8月9日は長崎ながさきに原爆げんぱくが投下され、ラジオから「長崎市の上空に特殊爆弾が投下されました。市民はすみやかに避難してください。」「長崎市は特殊爆弾の投下により火災が発生している。市民は直ちに消火につとめてください。」と繰り返し放送されていました。昭和20年8月15日、日本はポツダム宣言を受諾し、太平洋戦争終結となりました。結果的に、大野村が戦場になることはありませんでしたが、長い戦時体制の中で荒廃した社会経済とくらしの立て直しを迫られることになりました。



写真10 牛頸女子青年団慰問講演会 昭和20年7月18日撮影

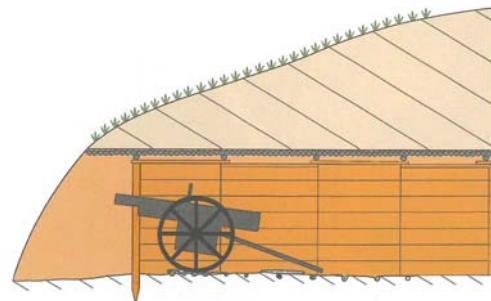


図3 牛頸野添遺跡第6次調査の洞窟壕想像図

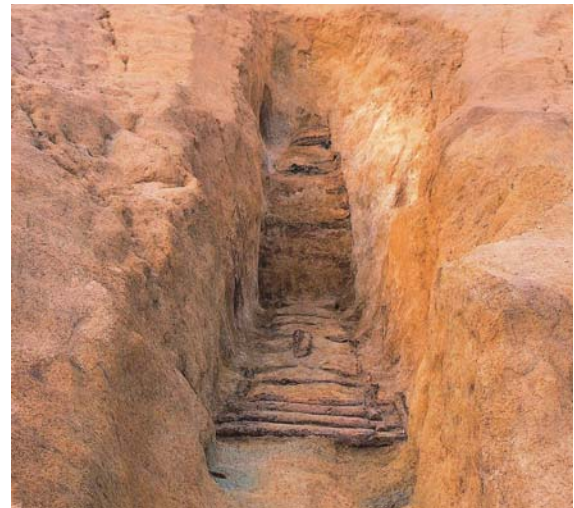


写真11 牛頸野添遺跡第6次調査の洞窟壕内部

3. 後世に引き継がれる戦争の記憶

太平洋戦争時の大野村の人口は約 9,350 人でしたが、人口の 7.5% に当たる約 700 人が召集され、そのうちの 31.4% にあたる 220 人が戦死しました。召集や戦死者に関する役場の正式記録は、太平洋戦争終結直後に軍の命令により焼却処分され残されていませんが、当時の大野村長・山上高太郎の日記に昭和 12（1937）～ 20（1945）年までの召集記録が克明に記されていました。

それによると、昭和 17 年以降、太平洋戦争の拡大とともに、戦地が南洋諸島に広がり、ガダルカナル島の戦いやビルマ戦争、硫黄島の戦いで大野村から出征した多くの若者が戦死していたことが分かりました。戦争で戦死した一人ひとは、家業の大事な担い手であり、家族や友人、そして地域社会にとってかけがえのない大切な大野村の若者たちでした。大野城市が終戦 50 周年に発行した市内在住者の戦争体験記には、戦地に送られた若者や戦死の知らせを受けた家族の気持ちが綴られています。

このころの戦場では、武器や弾薬、食糧、医薬品がまったく行き届かない状況に陥っていました。そんな中での戦闘は悲惨さを極め、その実情を知るには、戦地から生還した戦争体験者の証言や手記が欠かせません。

ここでは、ビルマ戦争の手記『戦時物語』からその部分を紹介しています。『戦時物語』はビルマ戦争に従軍した井手貞一さんが戦闘の様子や捕虜生活のことなどを、終戦から 33 年にあたる昭和 53（1978）年 8 月 15 日に鎮魂と懺悔を込めてまとめられたものです。今回、掲載させていただいた部分には兵士だけでなく、非戦闘員の従軍看護婦との戦地でのやりとりが描かれており、これまで伝えられてこなかったビルマ戦争の実態を知ることができます。時の経過とともに戦争体験者から直接、証言を聞くことが物理的に難しくなっている中、戦争遺跡や資料だけでなく、このような戦争の記憶も後世に引き継がれるべき大事な遺産です。



写真 12 西鉄春日原駅の見送り

赤司岩雄氏所蔵



写真 13 出征前の家族写真

「たのむ」の一言を残して 田中ハルさん（大野城市平野台在住）

昭和十八年秋― 覚悟をしていたとはいえ、赤紙が届けられた時は、目の前が真っ暗になり、全身から血の気が引くのがわかった。明日は入隊というあわただしさ。

「しつかりたのむ。」

夫はそれっきり何もいってはいけなかった。

その日から、季節感にひたる暇もない、戦争と家を守ることに明け暮れた日々のがよみがえってくる。

軍隊の思い出

柴田正美さん（大野城市筒井在住）

昭和十九年二月九日、特別幹部候補生採用検査通知（福岡聯隊区司令部発行）により、福岡市因幡町（現福岡市中央区天神）教育会館で身体検査、二月十六日大名小学校で学科試験を受け、四月十日頃待望の合格通知が届いた。

四月十七日、中学同窓会数人を自宅に招いて、ささやかな送別会をした。

四月十九日、近所の人達から『千人針のお守り』を頂き、氏神に参拝。必勝と武運長久を祈願。国鉄水城駅に向かった。再び見ることはない山や川、田畑、集落の風景に別れを惜しみ、菜の花の香りを含んだ爽やかな風を受けながら、足に伝わる大地の感触を噛みしめるように、一步一步と歩を進めた。過去に多くの出征兵士を見送った時は、随分遠く感じたが、このときばかりは緊張のせい、余りにも近く感じた。多くの見送りの人達が、手に手に振った日の丸の旗の波と、万歳の声と感激が体に焼き付いている。

私の戦争

中野スガノさん（大野城市下大利団地在住）

八月十五日昼すぎ、いつものように山間のたな田に出て兄夫婦と田の草取りをしていますと雪でも降るように足もとと言わず山も田畑もおおいかくすように白い紙がパラパラと舞いおりてきました。見上げると空は銀色にキラキラ輝いてまるでおとぎ話の世界にいるようで足がふるえたのを今でも覚えています。一枚拾い上げて読みますと、！！日本が、戦争に負けた！！という内容でした。毎日、毎日ラジオや新聞で『日本は勝った。また勝った。』と聞かされていたので、「そげなことがあるもんか。またアメリカの宣伝ぜ。」と一笑にふしながら農作業にもどったのでした。…中略…

木陰に寝かしていた娘を背負って帰りを急ぐ途中、ほこらの前に数人集まって大きな声で

「ラジオが言うたばい。日本が負けたげな。」

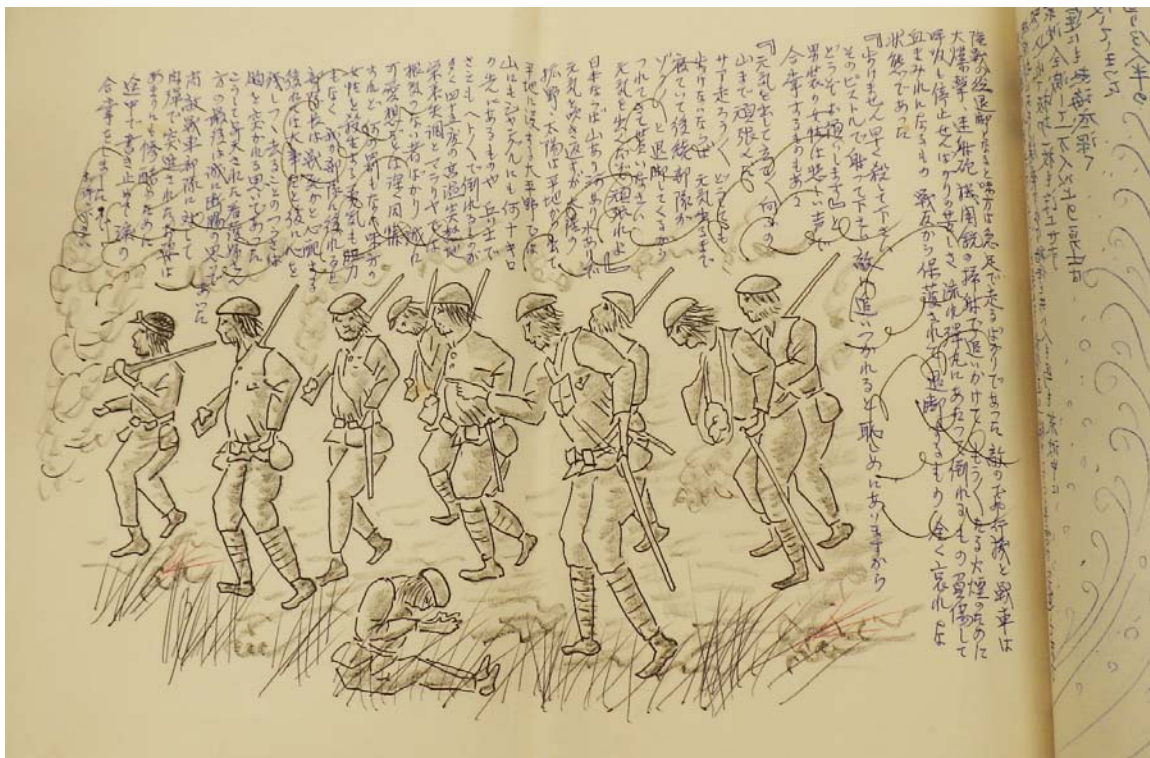
「ほんとうな。」

などと話し込んでいました。私は日本が負けたことより夫がどうなったか、との思いのほうが、頭をよぎり、家に着くなり、手足を洗うのも忘れ仏前に座り込み、一回火を灯してはすぐ消し大事に何回も使ってきた「ろうそく」に火をつけ、消すのも忘れ、いつまでも手を合わせて夫の無事を祈ったものでした。

稲刈りがすみ…やがて雪が降り、娘を背負って麦踏み、そして麦の穂が色づいた頃、役場からの連絡で兄（戦地より帰った）と一緒にいつて見ますと、係の人から白木の箱を渡されました。この時、係の人がどんな話をされたのか、私が何を言ったのか今では定かではありません。唯、夫が娘の顔を一度も見ずに死んだことが口惜しく大声でわめいたのは、今でもはつきりと覚えています。

陸戦の総退却となると味方は急足で走るばかりであった
 敵の飛行機と戦車は大爆撃、速射砲機関銃の掃射で追いかけて もうもう
 たる火煙のために 呼吸も停止せんばかりの苦しさ 流れ弾丸にあたって
 倒れるもの 負傷して血まみれになるもの 戦友から保護されて退却する
 もの 全く哀れな状態であった
 『歩けません 早く殺してください』
 そのピストルで射つて下さい 敵に追いつかれると恥しめにあいますから
 どうぞお願いします』と男装の女性は悲しい声で合掌するものもある
 『元氣を出して立て立て 向ふの山まで頑張らだ サア走ろう走ろう どう
 しても歩けないならば元氣出るまで寝ていて 後続部隊がゾクゾクと退却し
 てくるからつれてきて貰いなさい 元氣を出すんだぞ 頑張れよ』
 日本ならば山あり河あり水ありで元氣を吹き返すが 大陸の広野・太陽は平
 地から出て 平地に没する大平野では 山にもジャングルにも何十キロの
 先にあるものや 兵士でさえもヘトヘトで倒れるものが多く 四十五度の高
 湿炎熱地 栄養失調とマラリアでは根気のない者ばかり 誠に可哀想だと
 は深く同情すれど 何の罪もない味方の女性を殺生する勇氣も胆力もな
 く 我が部隊に後れると部隊長は戦死かと心配する 後れては大事だと後
 に心を残しつつ 去ることのつらさは胸を突かれる思いであった こうし
 て昇天された看護婦さん方の最後は誠に断腸の思いであった
 尚 敵戦車部隊に対して肉弾で突進されたお姿は あまりにも惨酷のため
 に 途中で書き止めて涙の合掌をしましたのでお許しください

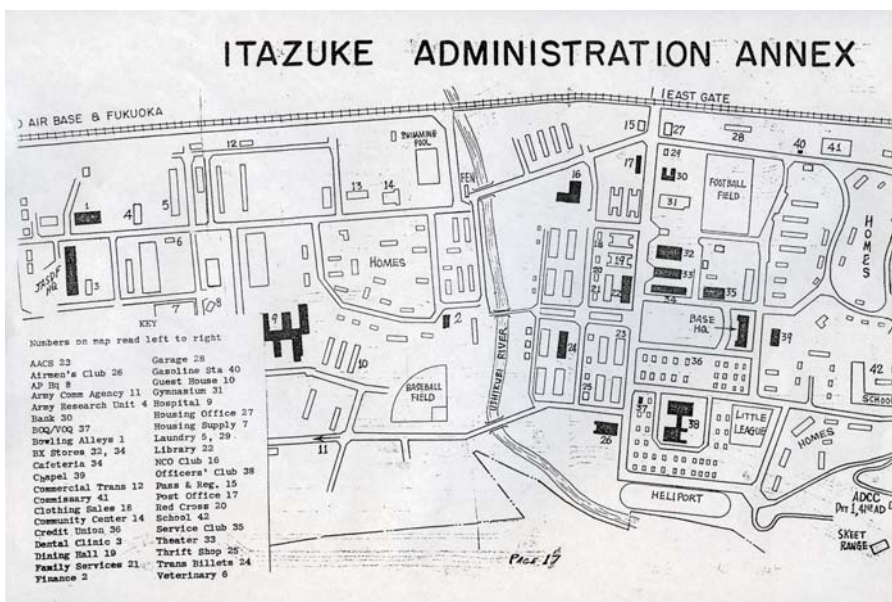
『戦時物語』井手貞一 昭和五三年八月一五日記 井手勲氏所蔵より一部紹介



4. 戦後のくらしと板付基地

昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日、太平洋戦争は終結し、日本各地に進駐軍が派遣され、飛行場や港湾施設、軍需工場などが次々と接収されていきました。福岡県にもアメリカ軍の部隊が派遣され、板付飛行場を中心とした板付基地の整備が行われ、基地の一部として、大野村と春日村にまたがる 156 万 4,700m²の広大な敷地に、アメリカ兵とその家族のための「春日原住宅地区」が作られました。アメリカ軍が駐留する板付基地の存在は、戦後復興を目指す地域経済を潤す効果があった一方で、基地があることによって生じた墜落事故や人的被害もありました。

昭和 32 (1957) 年、基地に駐留するアメリカ人の人口は、軍人が約 6,400 人、軍の関係者やその家族が約 2,900 人、およそ 1 万人が春日原住宅地区や米軍ハウスで暮らしていました。こうした人々の生活を支えた春日原住宅地区は、宿舎や家族用住宅、病院や学校、スーパーマーケット (BX やカミサリー)、スポーツ施設 (ボウリング場、野球場など)、映画館、レストランなど生活に必要な施設がなんでもある場所でした。アメリカ軍が駐留する兵に支給していた春日原住宅地区の案内パンフレットからは、施設の配置や充実ぶりをうかがうことができます。基地内はアメリカ軍の管轄であり、基地の記念日や開放日以外で日本人が自由に出入りすることはできませんでしたが、基地内で働く人たちは例外でした。レストランやクリーニング屋、BX タクシーなどの基地の中の様々な施設で多くの日本人が働いていました。春日原住宅地区には北門 (ノースゲート) と東門 (イーストゲート) があり、東門は西鉄白木原駅に通じていました。昭和 23 (1948) 年に東門から西鉄白木原駅までの道ができると、通りにはアメリカ兵相手のバーやレストラン、テラー、クリーニング屋、電気屋などが立ち並ぶようになりました。アルファベット表記の店の看板は夜になるとネオンが点り、他所にはない活気と風景がありました。今も当時の名残で「白木原ベース通り」と呼ばれています。



アメリカ兵向け板付基地 (春日原住宅地区) の案内パンフレット
春日市教育委員会所蔵



写真14 白木原ベース通りの英語看板
麻生政昭氏所蔵

板付基地春日原住宅地区東門（イーストゲート）

二日市 国鉄白木原駅 博多



図4 白木原ベース通りの店舗配置略図（昭和37年頃）

4.1 板付基地の生き証人「米軍ハウス」

昭和 25 (1950) 年に朝鮮戦争が始まり、板付基地に駐留するアメリカ兵が増員され、春日原住宅地区の外にもアメリカ兵が使用する住宅が建てられるようになりました。こうした住宅は「米軍ハウス」と呼ばれ、大野町と春日町には、当時 500 戸ほどの米軍ハウスがあったと記録されています。米軍ハウスは木造平屋の一戸建てで、外壁や破風がモルタル塗り、セメント瓦の屋根で、床はフローリング、洋式の水洗トイレやシャワーがあるといた特徴があります。ハウスの壁にはアメリカ軍が管理する住宅を表す「IAB (Itazuke Air Base)」の文字と数字が書かれていました。

米軍ハウスは昭和 47 (1972) 年に板付基地が完全撤収した後、一般住宅や賃貸、店舗に使用されていましたが、その数は年々減少しています。令和 2 (2020) 年 2 月まで大野城市瓦田にあった米軍ハウス (愛称；ソテツハウス、以後ソテツハウスと表記) はかつて基地が大野城市にあった記憶をとどめる建造物であることから、大野城市教育委員会では九州産業大学建築都市工学部 松野尾研究室と春日ベース・ハウスの会の協力を得て、ソテツハウスの記録調査を行いました。ソテツハウスは改変が少なく、出窓や内部の塗装、浴室のタイルなどのインテリアからも当時の息づかを感じることができる希少な建物でした。



写真 15 在りし日の米軍ハウス“ソテツハウス”外観



米軍ハウス“ソテツハウス”の間取り 九州産業大学建築都市工学部 松野尾研究室提供

4.2 板付基地と白木原ベース通りの思い出

板付基地の思い出

呉世宏さん（大野城市白木原在住）

義理の兄が芦屋でテーラーをしていて、大学を卒業するタイミングで店を引き継ぎました。白木原ベース通りの店に移ったのは、芦屋の基地からアメリカ軍が撤収した時なので、55年くらい前ですね。店の名前はアーコン商会(Ah Kong Co., Ltd)。米軍将校専門のテーラーでした。

当時、板付飛行場はアメリカ軍の基地で、ハワイやフィリピンの基地から将校が飛行機で飛んでくるんです。板付飛行場にきた将校は、まず私の店に服を作りに来るんですよ。生地を選んで採寸してから基地に報告に帰り、シャワーを浴び、食事をして、1時間半くらいして私の店に来て仮縫いをするんです。翌朝11時頃に出発する時には服ができてるので受け渡します。当時は店の裏にあった米軍ハウスを1軒借りて、5人の職人さんがウワモノ、シタモノ、まとめ、仕上げと分担作業で、一晩で5～6着作ることもありました。1着上下で50ドル、18,000円で売っていたんですよ。服の生地はみんな神戸から仕入れていました。高級な生地ではなくて、丈夫な生地でパステルカラーが人気でしたね。将校たちは、アメリカからブルックスブラザーズの流行の雑誌を取り寄せていて、雑誌のモデルが着ているものを作ってくれと言われて。見るだけで作れますよ。特に黒人の将校がおしゃれで、その流行を白人の将校がまねしていましたね。



写真 16 白木原ベース通り 昭和36年



写真 17 店内の様子 呉世宏氏所蔵



写真 18 アーコン商会前で記念写真 呉世宏氏所蔵

私の夫の光夫さんは昭和36（1961）年～40（1965）年くらいまで、板付基地内の板付BXタクシーに勤務していました。基地には自転車で通勤していました。タクシー会社で働き始めた頃は写真に写っている車ではなく、色は茶色で扉が観音開きの車でした。写真の車は下が濃い茶色で上は薄い茶色、ベージュ色。基地に住む米兵が利用するタクシーで、夫は英語が分からなかったけど、米兵とやり取りするうちになんとなく会話して、英語を自然と覚えていました。行き先を聞くときは「ホイゴン」（Where are you going ?）で通じるんですよ。

基地内にはBX Storeというスーパーマーケットがあって、チョコバーとか、バタークリームじゃなくて、生クリームのケーキとかを買ってきていました。ビールやコーラはケース入りの瓶で勤務中にタクシーでちょっと家に寄って、置いて帰ったりして購入して、なんでも安く手に入っていました。買ってもらっていたのかな。

タクシーで米兵のお客さんを乗せて、突然、家に遊びに来たことがあって、私もびっくりしたけど、子供が外国人は初めて見るでしょ。だからびっくりしていました。

白木原ベース通りの真ん中あたりにハンバーガー屋さんがあって、おいしかったです。

板付飛行場からジェット機（三角形の軍用機）が飛び立つ時の音がすごく「グアラ、グアラ、ガア、ガア」と腹を扶る様な音に外で遊んでいた子供がびっくりして家に飛び込んできたり、台所の流しの上の釘に掛けていた鍋が「カラン、カラン」と音と振動で転げ落ちてくる状態で、そりゃ、住んでいた者でないとわからないでしょうね！！



写真 19 Itazuke BX Taxi（板付 BX タクシー）

東司ミドリ氏所蔵

車種はいすゞ自動車のBELLEL（ベレル）で昭和37（1962）～42（1967）年まで製造された。トラック用ディーゼルエンジンを転用したことから、騒音や振動が激しく自家用車としては普及しなかった。ディーゼルエンジン車の経済性からタクシーとして使用された貴重な一枚。

タイガーと呼ばれた男

いのうえよしひさ
井上善久さん（大野城市上大利在住）

昭和 33（1958）年、高校一年生の時に、先に基地で働いていた高校の同級生に紹介されて、基地内のカミサリーで働くようになりました。カミサリーは今のスーパーマーケットと同じで、勤務時間は朝 10 時から午後 4～5 時頃まで働いていました。仕事の内容は、引き込み線で基地内に運ばれてくる荷物を倉庫に運搬、整理、商品陳列、それからデリバリーボーイをしていました。デリバリーボーイは、ベルトコンベア式のレジから流れてくる商品を紙袋に詰めて、車まで運んだり、家まで配達する仕事でした。

その後、米軍基地向けに発行する星条旗新聞の新聞配達員として働きました。販売事務所は基地内のトタンをカマボコ状にまげて打ち付けているだけの簡単な造りのカマボコ兵舎でした。「PACIFIC STARS AND STRIPES」と書かれた車で国鉄博多駅に新聞や雑誌などを受け取りに行き、配達人 15 人ほどで自前の自転車や徒歩で基地内外にあるハウスに新聞を配達していました。

昭和 36（1961）年に、新聞配達員を対象とした人気投票用紙が用意され、そこに優秀な配達員の名前を米兵たちに書いてもらい、その投票率を競う「タイガーコンテスト」が開催されました。新聞に投票用紙が挟まれていて、新聞配達員の名前を書いて投票するのですが、自分は新聞配達の際に、自ら投票用紙をハウスに住む米兵に渡して「YOSHIHISA INOUE」とアルファベットを書いてもらい、投票用紙を自分で回収しました。結果、自分が板付基地トップの投票数を獲得し、板付基地のトップになり、東京の港区麻布にある星条旗新聞本社で開催されるタイガーコンテスト全国大会に出場することになりました。昭和 36 年 7 月に FEN（極東放送）放送局にてインタビューを受け、板付基地司令官にコンテスト出場の記事を寄りました。その後、板付飛行場から軍用機に乗って出発し、岩国基地へ行きました。岩国基地のタイガーと一緒に、厚木基地へ向かい、厚木基地で宿泊して、翌日、星条旗新聞本社で面接を受けました。

その結果は、惜しくも全国 2 位となりました。全国 1 位になったのは、御殿場基地の佐藤くんという同じ高校生でした。板付基地に戻って、星条旗新聞の仕事がまた始まり、配っている



写真 20 板付基地のスーパーマーケット「カミサリー」の仕事仲間と写真撮影

新聞に御殿場基地の佐藤くんがハワイに行くという記事を見て、悔しい思いをしましたが、良い思い出となり、その時の副賞はタイガーコンテストの楯と自転車でした。

米軍ハウスは白木原、春日原、雑餉隈、下大利にあって、私は白木原と春日原の一部が新聞配達を担当でした。米軍ハウスの外観は柱や出窓が緑、壁が白で、網戸が付いたドア、夏場や冬場には窓の外に暑さや寒さ対策のビニールを下げていました。新聞を配達する順番で昼の12時前後に新聞を配る米軍ハウスがあって、メイドさんが日本人ということもあり、食事をおよばれたことがありました。

そのとき、食べた鮭のムニエルはバターで焼いたいい香りのするもので、スープとパンが付いていて、さらにコーヒータイムにはショートケーキの横にアイスクリームがワンディップついているといった感じで、ちょっと日頃では食べられないようなものを食べさせてもらいました。ミルクシェイクは牛乳にアイスクリームを「ワンディップ？ツウディップ？」と聞かれて、ミキサーでかき回して作る、それは美味しいものでした。アイスクリームはカップでなく、箱に入っており、味はバニラ、ストロベリー、チョコ。ストロベリーがおいしかったです。ファンタグレープを初めて飲んだときは美味しくてびっくりしたことを覚えています。



写真 21 星条旗新聞 (Pacific Stars and Stripes) の社用車



写真 22 星条旗新聞の事務所



写真 23 板付基地司令官と優勝の地・ハワイを夢見て
写真 20～23 井上善久氏所蔵



タイガーコンテスト副賞の楯
井上善久氏所蔵

アップルパイが忘れられなくて

麻生政昭さん（大野城市白木原在住）

父が板付基地所属の消防士しょうぼうしをしていて、母はベビーシッターをやっていました。自分は毎日スクールバスで基地の子供達と一緒に、当時都府楼とふろうにあったちいさこべ幼稚園ようちえんに行っていました。幼稚園に行くと、園児の半分はアメリカの子供達で、家に帰ると母がベビーシッターだったので、私は毎晩、母と一緒に米軍ハウスに行っていました。家の近くは米軍ハウスのほうが多くて、日本人よりもアメリカ人の家族の方が多く住んでいました。母がベビーシッターをしていた米軍ハウスの住人は将校クラスの人達で、彼らが夜はナイトクラブに行っている間、母がハウスの子供達のお世話をしていました。私も毎日、ハウスの子供達と遊んでいたのものごころがついた頃から英語はしゃべれていました。

中学生ちゅうがくせいになって、英語の授業じゆぎょうを楽しみにしていましたが、先生の英語がまったく分からない。教科書きょうかしょを読んでも分からない。アメリカ人達が言う水みづのことはウォーターではなくワラワラでした。私が米語発音で教科書を読むと先生からそれは間違いだと指摘されました。中学、高校こうこうの英語はあんまり好きじゃなかった。私が子供の頃、父がBXだと思っんですが、アップルパイを買ってきてくれて食べた。「うまいなあ。こんなにうまいものがあるんだろうか」と思った。そのアップルパイがすごくおいしくて、ず〜っとアップルパイが忘れられなくて、大学時代の春休みにアップルパイを食べるのを目的の1つに2ヶ月ほどアメリカ横断の旅行に行きました。10年ぶりにネイティブな英語に触れたら、英語を思い出して、聞いた英語が全部分かるんですね。もちろん美味しいアップルパイにも出会えました。両親共英語教育を受けていない世代だけど、生活に必要なであればなんなく外国語はマスターできるんだなと感じました。板付基地がもたらしたもののひとつに、白木原に住んでて商売している人はみんな英語がしゃべれたんじゃないかな。



ちいさこべ幼稚園での集合写真（前列中央が麻生政昭さん） 麻生政昭氏所蔵

「テキサスで出会った^{しらきばる}白木原の人」

^{つつみ しんいちろう}堤 慎一郎さん（福岡市博多区在住）

昭和 46（1971）年に航空自衛隊春日基地^{こうくう じえいたいかす が き ち}へ転属になって、基地内の自衛隊独身用宿舎に入りました。航空自衛隊春日基地は昭和 29（1954）年に板付基地^{いたづけ}に間借りする形で、板付基地^{ま が}の敷地内^{しきち ない}に航空自衛隊春日基地が開庁。春日基地と板付基地とを仕切る壁や鉄条網^{てつじょうもう}はなく、ランニングで板付基地内を走り廻^{まわ}っていました。基地内の劇場^{げきじょう}にコンサートを聞きに行ったり、音楽フェスティバルの時には最前列^{さいぜんれつ}より前でマイクを渡したり、照明^{しょうめい}をしたりするお手伝い^{てつだ}をし、ボウリング場も使うことができ、私はボウリングはしなかったけど、同僚のゲームを見ていました。板付飛行場^{ひ こうじょう}に勤務^{きん む}していたアメリカ兵^{へい}に、「博多^{はかた}に結婚^{けっこん}したい女性^{じょせい}がいて、両親^{りょうしん}に会いに行つたけど、結婚^{けっこん}に反対^{はんたい}されている。どうしたらいいと思うか。」と相談されたので、「押し^おして、押し^おして、よく誠実さを伝えて、それでもだめなら駆け落ち^{か お}しろ。」とアドバイスしました。「駆け落ち^{か お}ってなに？」と質問され、「エスケープだ。」と教えてあげました。アメリカ兵はその後、何度も何度も博多^{はかた}に挨拶^{あいさつ}に行つて、アメリカに帰る時には結婚^{けっこん}を許^{ゆる}してもらつて。その夫婦は幸福な家庭を築き、夫がリタイアした後、妻は社会人^{しゃかいじん}大学生^{だいがくせい}となつていて、2004年にハワイで再会^{さいかい}しました。昭和 47（1972）年に板付基地^{へんかん}が返還^{かんとん}され、アメリカ軍は完全撤収^{かんぜんてつしゅう}。その時、板付基地内のコミュニティセンターで、さよならパーティーとセレモニーが開かれ、私はお手伝い^{てつだ}でパーティーの保安要員^{ほ あんよういん}として立ち会いました。

昭和 53（1978）年に渡米訓練でテキサス州の軍施設内の宿舎に滞在^{たいざい}して、基地内のスーパーマーケットの BX に行くとき日本人の方がレジ打ち^{レジうち}で働いていて、お互いに日本の方かな？と思つて声をかけたら、「あなたはどこから来たかね？福岡^{ふくおか}から来たと！私は白木原の出身で、板付基地で働いている時にアメリカ人の夫^{おつと}と出會つて、こっちに来たと」と言われて、テキサスでの白木原の女性との出會いに驚きました。

現在は板付基地用地も返還^{かんとん}されて、大きく変貌^{へんぼう}した。当時の日本人からは豊かに見えたアメリカ人のハウスでの生活と、鉄道引込線や劇場、プール、ボウリング場もなくなりました。しかし、若い頃に出會つたアメリカ人達の生活や文化を、自分が住む福岡の歴史の一部として懐かしく思えます。



板付基地（板付飛行場）のアメリカ兵

麻生政昭氏所蔵

5. おわりに

太平洋戦争終結 75 年の節目に合わせ、企画展「大野城市の戦争とくらし」の準備作業を続けていた令和 2（2020）年 2 月 3 日、某博物館の内覧会に代理出席した帰り道のことでした。西鉄白木原駅を降り、瓦田の住宅街を抜け、職場に向けて歩いていた時、私は白い幕に覆われて、今にも解体寸前の米軍ハウスの前で立ちつくすことになりました。その米軍ハウスの存在は以前から認識していましたが、今まさに目の前から消え去ろうとしていたのです。それから 2 週間、所有者や解体業者の方々のご協力を得て、九州産業大学建築都市工学部や春日ベース・ハウスの会の皆様と、解体作業の間隙をぬっての写真撮影と実測作業、模型作成といった記録調査を行うことができました。

この調査結果を踏まえた展示準備作業を加速させていた矢先、4～6 月に予定していた企画展は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、秋に延期することになり、展示の仕切り直しを余儀なくされました。

そんな折、本市広報で企画展の開催告知を見た井手勲さんから「亡き父がビルマ戦争に行った時の手記を受け継いでいます。少しでも展示の役に立てれば」と連絡をいただき、急遽、8 月に資料調査を行いました。ビルマ戦争の手記『戦時物語』は勲さんの父・井手貞一さんが終戦から 33 年となる昭和 53（1978）年 8 月 15 日にまとめられたもので、挿絵とともにびっしりと文章が書きこまれ、戦争の実情を後世に伝えようという遺志を強く感じさせるものでした。手記の冒頭には「自由に恵まれた日本に変わったため、再び戦争歴史を繰り返されるような間違いが無いように」、最後に「国内外の人命を失い、荒廃せしめた障害を償う術はなく懺悔のほかには信義はない」と記されていました。

この貴重な手記を企画展で初公開させていただいたところ、ビルマ戦争の手記は新聞各社で取り上げられました。展示期間中に手記の掲載された新聞を片手に県内外から多くの方が来館され、じっくりと時間をかけて観覧されている姿は非常に印象的でした。「父がビルマ戦争に行って亡くなったと聞いているが、どこでいつ亡くなったのか何も分からない。」や「戦地で何があったのか、本当のことが知りたい。」と、戦後から 75 年経った今も『情報』を求めて、企画展に足を運んでくださった遺族の方々の思いを聞かせていただくことができました。

今回、企画展「大野城市の戦争とくらし」の開催および本書作成の過程で痛感したことは、時間の経過や社会情勢の急激な変化の中で、戦争の記憶を残し、伝えていくことの難しさでした。しかし、展示やイベント、そして地道な調査を継続することで、新たな資料の発見や証言を得ることができました。

本書で紹介できなかった内容については今後、いずれかの形で公開していき、「戦争のない平和なくらしがあたりまえ」にすこしでも貢献できればと考えています。

参考文献

- 大野町 1961『国鉄白木原駅開業記念』大野町
- ちいさこべ幼稚園 1964『こころのふるさと』昭和38年度 在園記念 ちいさこべ幼稚園
- 進藤樹之助・加藤直勝編 1979『写真集 郷土部隊の戦歴』秋田県の戦友Ⅱ ツバサ広業株式会社
- 春日市史編纂委員会編 1994『春日市史（中）』春日市
- 大野城市 1995『終戦50周年記念 戦争体験記（世界の恒久平和を祈念して）』大野城市
- 粕屋町教育委員会 1997『平成9年募集 一戦争体験記一』粕屋町教育委員会
- 石野田 豊 1997『基地物語』
- 大野城市立大野中学校選択社会科 1999『アメリカ軍がこの町にいた頃』大野城市立大野中学校
- 大野城市史編さん委員会編 2004『大野城市史 下巻』近代・現代編 大野城市
- 大野城市教育委員会 2006『牛頸野添遺跡群Ⅲ ～第6・8次調査～』大野城市文化財調査報告書第69集 大野城市教育委員会
- 大野城市教育委員会 2007『大野城市の文化財第39集 大野城市の遺跡⑩ 南大利編』大野城市教育委員会
- 大野城市教育委員会 2013『後原遺跡3 一第22次調査一』大野城市文化財調査報告書第109集 大野城市教育委員会
- 大野城市教育委員会 2013『乙金地区遺跡群7 ～原口遺跡第1～4次調査～』大野城市文化財調査報告書第110集 大野城市教育委員会
- 大野城市教育委員会 2015『乙金地区遺跡群12 ～古野遺跡第2・3・5次調査～』大野城市文化財調査報告書第123集 大野城市教育委員会
- 筑前町 2015『筑前町立大刀洗平和記念館常設展示案内』筑前町
- 大野城市教育委員会 2016『乙金地区遺跡群15 ～王城山遺跡第1・2次調査～』大野城市文化財調査報告書第139集 大野城市教育委員会
- 大野城市教育委員会 2017『乙金地区遺跡群21 ～古野遺跡第4次調査～』大野城市文化財調査報告書第157集 大野城市教育委員会
- 大野城市教育委員会 2018『大野城市の文化財 第48集 大野城市の遺跡⑫ 乙金地区遺跡群総集編』大野城市教育委員会
- 春日ベース・ハウスの会 2019『福岡県春日市内の米軍ハウス調査記録 米軍ハウスの世界 ～あのことろ、春日のまちにアメリカがあった～』春日ベース・ハウスの会
- 福岡県教育委員会 2020『福岡県の戦争遺跡』福岡県文化財調査報告書第274集 福岡県教育委員会
- 大野城市歴史資料展示室解説シート 歴史No.1「本土決戦」大野城市教育委員会

大野城市の戦争とくらし

大野城市の文化財 第51集

令和3年3月31日

発行 大野城市教育委員会

福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

九州コンピュータ印刷

福岡市南区向野1丁目19番1号

